

ペットからの感染を防ぐために

動物由来感染症 ハンドブック



皮膚糸状菌症
Dermatophytosis



鳥インフルエンザ
Avian Influenza

回虫症
Toxocariasis



Q熱
Q fever



狂犬病
Rabies
パステウレラ症
Pasteurellosis
レプトスピラ症
Leptospirosis
⋮



日本医師会

はじめに

21世紀に入りウエストナイル熱、重症急性呼吸器症候群(SARS)、鳥インフルエンザといった動物由来感染症が世界の各地域で発生し尊い生命が失われています。我が国でも、山口県、大分県、京都府、茨城県、宮崎県等で鳥インフルエンザが発生したことは記憶に新しいところです。

国民の安全と安心に対する関心がこれまで以上に高まっている中で、ペットの種類も多様化し、動物由来感染症が問題となっています。特に最近、イヌ、ネコ、トリのみならず、イグアナ、ミドリガメ等をペットとする人も増えています。オウム病やエキノコックス症等をはじめ、わが国では1957年以来国内発生していない狂犬病の輸入さえも懸念されていました。2006年にはついに、海外で犬に咬まれ帰国後に狂犬病を発病し、2名が死亡しました。大切なことは、ヒトと動物の共通の感染症について正しく理解し、その予防を図ることです。

日本医師会感染症危機管理対策室では動物由来感染症の実態を知り、正しい知識を身につけていただくため、平成17年1月に市民公開講座を開催し、その模様を同年3月26日にNHK教育テレビ「土曜フォーラム」で放映いたしました。その際の資料として、「動物由来感染症ハンドブック～ペットからの感染を防ぐために～」を作成し、現在までに約8万5千部を配布しておりますが、ご好評いただいておりますことから、改訂のうえ増刷した次第であります。

本冊子は、動物由来感染症に造詣の深い兼島孝先生(みずほ台動物病院院長/琉球動物医療センター院長)にご執筆いただき、また、日本医師会感染症危機管理対策委員会委員の先生方にも協力をいただき完成しました。

ペットを飼育されている皆さんがお手元においてご活用いただき、お役に立てていただければ幸いです。

平成19年3月

日本医師会常任理事
感染症危機管理対策室長
飯沼 雅朗

CONTENTS

はじめに

ペットから病気がうつる? ————— 3

■第1章 イヌからうつる ————— 4

パストツレラ症 (Pasteurellosis)

レプトスピラ症 (Leptospirosis)

瓜実条虫症 (Cestodiasis)

狂犬病 (Rabies)

エキノコックス症 (多包虫症) (Echinococcosis)

■第2章 ネコからうつる ————— 13

イヌ・ネコ回虫症 (Toxocariasis)

Q熱 (コクシエラ症) (Q fever)

ネコひっかき病 (Cat Scratch Disease)

トキソプラズマ症 (Toxoplasmosis)

■第3章 トリからうつる ————— 20

鳥インフルエンザ (Avian Influenza)

オウム病 (Psittacosis)

クリプトコックス症 (Cryptococcosis)

■第4章 ウサギ・ハムスターからうつる — 26

皮膚糸状菌症 (Dermatophytosis)

■第5章 輸入動物からうつる ————— 29

サルモネラ症 (Salmonellosis)

■第6章 予防方法 ————— 32

あとがき ————— 33

ペットから 病気が うつる？

動物由来感染症は、動物好きなら誰でも興味のあるところだと思います。

以前は、愛玩用に動物を家で飼うという形態が多かったのですが、最近では、“愛玩動物”という意味合いよりも、よりヒトに近い存在“伴侶動物(コンパニオンアニマル)”として飼われるように、いや、暮らしを共にするようになりました。そして、寝起きから、外出、しいては動物を中心に生活形態をとる家庭も増えました。また、核家族では、動物は子どもの情操教育に重要な位置を占めるようになり、そのような状況下で、動物の病気のうち、ヒトにうつる可能性のある感染症は、特に気になる問題となりました。

日本は豊かになり、動物番組、書籍やインターネットなどの情報で“動物由来感染症”の危険性を誰もが知りえる時代になりました。しかし、多くのものが、動物の病気が“怖い”、“うつるとたいへん！”というような内容で報告され、世間は過剰反応を起こしています。中には、(殺)処分したほうがよいようなことを記載しているものもあります。

読者の皆さんに、“動物由来感染症”に興味をもっていただき、そのうえで知識をもち“病気は治るもの”、“予防できるもの”という認識をもっていただけたら幸いです。

(兼島 孝)

第1章

イヌからうつる

2万年前からヒトとイヌは共に暮らしていました。

はじめは、ヒトが狩りをした後のおこぼれを狙っての接触でした。そして、時間をかけてその距離は縮まってきました。イヌからうつる病気のことを考えなければいけませんが、ヒトはそういう状況下で2万年もイヌとつき合ってきました。

2万年の歴史の中でどうして今さら、イヌからうつる感染症がクローズアップされてきたのでしょうか。

飼い方の形態がずいぶん変わったからではないでしょうか？

2万年前からつい数十年前までは、イヌは家族ではなかったのです。番犬であったり、家畜であったり、保温のための生き物だったのです。ある程度の距離があるからイヌからうつる感染症がそれほど問題にならなかったのです。

カンセンシヨク





パストレラ症 (Pasteurellosis)

キーワード	ひよりみ 日和見感染症※、こうくう 口腔内細菌、化膿
病原体	パストレラ菌
感染動物	イヌ、ネコ

【動物の症状】 無症状、呼吸器症状

【ヒトの症状】 外傷性：局所の疼痛（ずきずき痛むこと）、発赤、腫脹、化膿

日和見感染症：呼吸器感染症、耳炎、副鼻腔炎

【感染経路】 外傷性：直接イヌやネコに咬まれる、またはひっかかれることにより感染。

吸入性：空気中にある菌を吸い込むことにより感染。

【感染経路を知る】

パストレラ菌は、健康なイヌやネコの口の中に存在する菌（口腔内正常細菌）であり、これらの動物に咬まれたりすると感染します。またネコは肢を舐める習性がありますから、爪にもこの菌がいることがあります。そのため、ひっかかれることによっても感染します。感染するとひどく化膿することがあります。

最近、高齢者や糖尿病など抵抗力の弱い人が、ペットと過度のスキンシップ（キスや、口移しでペットに食餌をあげるなど）により、この菌が体内に入り込み感染するという日和見感染的なことも多いことがわかってきました。



【病原体データ】

パストレラ菌はほとんど100%の健康なネコの口腔内に、また、約半数の健康なイヌの口腔内に存在する菌なので除菌はたいへん難しいです。咬傷によるパターンと、パストレラ菌を吸い込むことで起こる呼吸器感染のパターンがあります。

咬傷では、30分～3日後で咬傷部位が赤く腫れあがり、痛みも伴います。慢性の気管支炎などの基礎疾患があるような場合は、パストレラ菌を吸い込んで呼吸器感染症となり慢性化することもあります。

【予防】

慢性的な病気で治療中のヒトは、イヌやネコとの過度のスキンシップを慎むこと。

部屋の空気を清潔に保つこと。

イヌやネコが、咬んだりひっかいたりしないよう、しつけること。

【治療】

早期の抗菌薬の投与

※ 日和見感染：普段は病害を与えない菌が、免疫力が低下した人などで突然病害を与える菌に変わって感染症を引き起こすこと。



レプトスピラ症 (Leptospirosis)

キーワード	皮膚感染、ネズミ、 <small>おうだん</small> 黄疸、ワイル病
病原体	レプトスピラ(細菌)
感染動物	イヌ、ネズミ、家畜、野生動物

【動物の症状】 イヌ：無症状、発熱、出血、腎炎、黄疸、死亡
ネズミ：無症状



【ヒトの症状】 無症状、悪寒、頭痛、筋肉痛、黄疸、出血傾向、蛋白尿、
死亡

【感染経路】 けいこう 経口、皮膚感染

【感染経路を知る】

レプトスピラ症は昭和10年代には毎年数千人の規模で発生し、毎年1000人近くのヒトが死亡するほど危険な感染症でした。その後、衛生環境の改善とネズミの駆除が進み、発生数は激減しましたが、ゼロにはなっていません。

レプトスピラは、主にドブネズミが無症状で保菌し感染源となっていて、その菌が尿から排泄され、水の中でも生きていけるので、川などで遊んでいる時にヒトに感染します。また、イヌのレプトスピラ症は、無症状の時もありますが、ヒトと同様に発熱や黄疸、腎炎を起こし、死亡する場合があります。ほとんどの哺乳類に感染しますので、家畜や野生動物でも注意が必要です。

この菌は、ヒトや動物の健康な皮膚にふれただけで感染する(皮膚感染)という大きな特徴があります。

【病原体データ】

レプトスピラは、スピロヘータというらせん状の細菌です。ドブネズミなどでは無症状で、腎臓で増えた菌を尿中に長い間出し続けます。ある調査によれば東京のドブネズミは高率でレプトスピラに感染していることがわかりました。水の中ではとても長い間生き続けますが、熱、乾燥、各種消毒薬には弱く、通常の消毒方法で、簡単に死滅します。

【予防】

イヌ：ワクチンの接種。

ヒト：保菌動物の尿、または汚染された水に直接ふれないようにすること。



ワクチンの接種。

保菌動物であるネズミの駆除。

【治療】

抗菌薬の投与



うりざねじょうちゅう

瓜実条虫症 (Cestodiasis)

キーワード	ノミ、寄生虫、瓜実
病原体	瓜実条虫
感染動物	幼虫：ノミ、シラミ 成虫：イヌ、ネコ

【動物の症状】 無症状、下痢、やせ

【ヒトの症状】 無症状、下痢(子ども)

【感染経路】 けいこう
経口

【感染経路を知る】

かいちゅう回虫症と同じくらいイヌやネコに多い寄生虫症です。瓜実条虫症の感染方法は回虫症のように、糞便に出る虫卵からヒトが感染するのではなく、ノミやシラミを介した感染でやや複雑となっています。ですから、瓜実条虫の虫卵を直接ヒトが食べても感染しません。ヒトでは幼児に多く、瓜実条虫に感染したノミやシラミの幼虫がついた畳やカーペットを舐めたりすると感染します。

【病原体データ】

瓜実条虫は長さ50cm以上にもなる長い虫です。イヌやネコが毛づくろいなどをして、条虫の幼虫を体内にもったノミやシラミがたまたま食べられると、条虫の幼虫は動物の腸の中で条虫の成虫へと成長します。瓜実条虫は検便では発見しにくい虫です。うんちやおしりの周りに小



さな虫がついていることで初めて気がつくケースが多いので、見逃さないようにしましょう。

【予防】

ノミやシラミの駆除(ノミやシラミの体内に糸虫の幼虫が寄生しており、つぶすことで汚染されるので、決してつぶさないでください)。

【治療】

くちゅうやく
駆虫薬



狂犬病 (Rabies)

キーワード	死、哺乳類すべて、ワクチン
病原体	狂犬病ウイルス
感染動物	すべての哺乳類

【動物の症状】 沈うつ、興奮、麻痺、死亡

【ヒトの症状】 動物と同じ。

【感染経路】 こしょう 咬傷

【感染症を知る】

狂犬病は動物からうつる怖い共通感染症の代表で、発展途上国を中心に世界中で発生しています。先進国のヨーロッパやアメリカ合衆国などでは、野生動物で感染が拡がり社会問題となっています。各国とも狂犬病を撲滅するためにたいへんな努力をしています。

しかし、日本は島国であること、狂犬病予防法で犬へ集団注射を行ったこと、輸入時に犬の検疫を行うことなどにより1957年以降、動物での国内発生はありません。しかし、海外で狂犬病の動物に咬まれて、国内で発症し死亡した事例が1970年に1件、2006年に2件ありました。



このように狂犬病は非常に重要な対策が求められる感染症のため、イヌでは狂犬病予防法、家畜では家畜伝染病予防法、ヒトでは感染症法で規定され、国内への侵入と発生を防いでいます。

これだけ、法で対応しても一つだけ抜け道があります。輸入動物です。ネコ、キツネ、スカンク、アライグマ、一部の動物では検疫が始まりましたが、多くの輸入動物は検査も検疫もありません。

【病原体データ】

狂犬病ウイルスは比較的弱いウイルスで、消毒薬や石鹼で死滅します。感染して、発症するまでの日数は、傷口から脊髄までの距離により違います。ウイルスは唾液に多く含まれ、傷口から侵入すると近くの神経にたどりつき、その神経を伝い脳に向かって移動します。その進行スピードは一日に8~22mmで、脳に達した時に神経症状が出て、治療不可能となります。ですから、頭近くを噛まれるよりは、足の先を噛まれる方が、免疫血清やワクチン接種などの治療を行う余裕があるのです。

【予防】

狂犬病予防法により91日齢以上のイヌは狂犬病ワクチンを打つこと、また登録も義務付けられています。

ヒトは、狂犬病流行地へ旅行する時は狂犬病ワクチンを接種してから旅行した方がよいでしょう。

【治療】

イヌや動物に噛まれたら、先ず流水で石鹼をつけて十分洗い、消毒します。医療機関で指示を受けてください。また、噛んだ犬の特徴を記録し、捕獲し動物病院で検査します。

輸入した神経症状の出た動物に噛まれたら、動物病院、保健所に直ぐ相談して下さい。

症状が出たら、治療法はありません。



エキノкокクス症(多包虫症) (Echinococcosis)

キーワード	キツネ、北海道、肝臓
病原体	エキノкокクス(多包条虫)
感染動物	幼虫：野ネズミ、ブタ、ヒト 成虫：キツネ、イヌ

【動物の症状】 無症状、下痢

【ヒトの症状】 無症状、肝腫大^{しゅだい}、腹痛、黄疸^{おうだん}

【感染経路】 経口^{けいこう}

【感染経路を知る】

エキノкокクス症とは、エキノкокクスに感染したキツネやイヌの糞便中に排出された虫卵^{ちゅうらん}が、ヒトの口に入り、肝臓をエキノкокクスの幼虫が侵食し、肝不全を起こす病気です。また、虫卵が入っている沢などの生水を飲んでも感染します。

エキノкокクスに感染したキツネは、糞便に多量の虫卵を排出します。自然界では、その虫卵を野ネズミが食べて感染します。感染した野ネズミではエキノкокクスの幼虫が肝臓を侵食し、キツネに再度感染する機会を待ちます。エキノкокクスの幼虫は虫卵をもっていないので、野ネズミ・ブタ・ヒトどうしではうつりません。

エキノкокクス症は、いまや北海道全体に拡大しています。また、道内の室内飼育犬にもエキノкокクスの感染が確認されています。転動や引越しで年間400頭近いイヌが北海道外に転出（イヌの登録データより）しており、さらに道外から多数のイヌが北海道を訪れ、道外へ戻っています。もし道外からのイヌが、北海道でエキノкокクス症の野ネズミを捕食すると、エキノкокクス症を上げないともかぎりま



せん。このようなこともあり、2004年の感染症法改正で、イヌのエキノコックス症は獣医師の届出対象になりました。

【病原体データ】

エキノコックスの成虫は、長さ数ミリの小さな条虫（サナダムシの一種）で、主に北半球に分布しています。日本では北海道のキツネ、イヌなどで感染が確認されており、感染したキツネ、イヌの糞便に虫卵が排出され、野ネズミがその虫卵を取りこんで感染します。この野ネズミをキツネ、イヌが捕食すると、感染のサイクルができます。ヒト、サル、ブタなども感染し、ヒトでは感染後平均20年もかけて肝臓内で増殖し、肝不全を起こします。

【予防】

感染したイヌに^{くちゅうやく}駆虫薬を使用すること。また、流行地ではイヌが野ネズミを食べないように放し飼いには十分注意しましょう。

エキノコックスの虫卵が付着している可能性のある山菜、野生果実や沢の生水は必ず加熱してから口にして下さい。

流行地では生ごみを放置しないなど、キツネの生育圏を拡げないための環境衛生管理が重要です。

【治療】

外科的切除



第2章

ネコからうつる

ネコの歴史はイヌ(2万年前)よりもずいぶん新しく、4000年前のエジプト時代からといわれています。当時のネコは、穀類貯蔵庫を荒らすネズミを駆除するために飼われていました。また、エジプトの壁画に描かれているように、神聖な動物として崇められていました。どうして崇められていたのでしょうか？

それは猫の瞳が、太陽光に反応して鋭敏に動くこと、また、闇の中で物を見ることができることは、夜、太陽がネコの目を通して下界を見るためだと考えられたのでネコ崇拝が生まれたのです。そのエジプトのネコはシルクロードを経て、仏教の伝来とともに、日本に輸入されました。船に乗せられた理由は、教典がネズミにかじられるのを防ぐためということです。





イヌ・ネコ回虫症〔Toxocariasis〕

キーワード	砂場、幼児、虫卵 ^{ちゅうらん}
病原体	ネコ回虫、イヌ回虫、アライグマ回虫、ヒト回虫 ^{かいちゅう}
感染動物	ネコ回虫：ネコ イヌ回虫：イヌ・キツネ・タヌキ アライグマ回虫：アライグマ ヒト回虫：ヒト

【動物の症状】 無症状、下痢、嘔吐

【ヒトの症状】 ネコ回虫、イヌ回虫：発熱、視力低下、脳炎

ヒト回虫：下痢、腹痛

アライグマ回虫：脳炎

【感染経路】 経口^{けいこう}

【感染経路を知る】

動物の回虫がヒトへ感染する経路は、複雑です。

動物の糞便から排泄された虫卵が口を介して感染するパターンとネコ回虫やイヌ回虫に感染した家畜の生の臓器（肝臓や肉の刺身など）を食べて感染するパターンがあります。

ネコやイヌの回虫卵が健康上問題のないヒトの体の中に入った場合、ほとんど心配いりません。しかし、免疫力の弱いヒトや幼児では、虫卵が腸の中で孵化^{ふか}し、回虫の幼虫が肝臓・目・神経など全身の内臓に移動して、いろいろな症状が出てしまうことがあります。

それを幼虫移行症といいます。目に侵入した場合は視力障害が起こり、神経に侵入した場合は、運動障害が起こります。

公園の砂場にはネコ回虫やイヌ回虫の卵があることが多く、よく知られているところです。あるデータによると東京の公園の砂場から最高で42%



のネコ回虫の卵がみつかりました。この高い汚染率でマスコミは“砂場が危険だ”と報道しました。そして、砂場の砂の消毒やネコが侵入しない砂場をつくるようになりました。しかし、その後の調査では、砂場からの子どもへの視力障害や神経障害のような重大な感染は、それほど問題ないことがわかりました。なぜなら、子どもの手洗いの励行や免疫力の強さから、感染が起きがたいのではないかと考えられているからです。

問題となる感染は、もう一つの感染経路である動物の回虫に感染した家畜の肝臓や肉の刺身などの生食であることがわかりました。

砂場で虫卵から感染する経路よりも、感染したニワトリやウシ、ブタの生の肝臓や肉の刺身を食べたほうが問題になるという報告も出ました。

【病原体データ】

ネコ回虫は長さ3～12cm、イヌ回虫は長さ4～18cmの細長く白っぽい虫です。ネコやイヌでは一般的な寄生虫で、世界中に分布しています。逆に日本ではヒト回虫はほとんど発生していません。

【治療】

回虫駆除剤



Q熱(コクシエラ症) [Q fever]

キーワード	謎の病気、発熱、倦怠感、ペット、家畜
病原体	コクシエラバーネッティイ (Coxiella burnetii)
感染動物	家畜、野鳥、野生動物、イヌ、ネコ、ダニ類

【動物の症状】 無症状、死流産

【ヒトの症状】 発熱、倦怠感、不定愁訴^{しゅうそ}*

【感染経路】 吸入(経口)^{けいこう}



【感染経路を知る】

10数年前までは、日本にQ熱は存在しないと考えられていた時期がありました。最近の研究でいろいろな病気との関連性があるのではないかと疑われてきています。たとえば、体がだるくて学校にも行かない怠け者だといわれ続けていたのに、病院で検査したところQ熱の感染がわかり、治療したためにすっかりよくなったという例もあります。家畜が多く感染していることは以前からわかっていましたが、家畜との接触がない人にも感染していることから、ペットからの感染が考えられるようになりました。そして日本でもイヌやネコの検査が行われ、ペットからの感染があるのではと考えられています。

【病原体データ】

コクシエラバーネッティイは非常に強く、乾燥状態でも長く生き続けます。また、ダニなどの節足動物を介さないで直接菌を吸入したりしても伝播でんぱされます。

ヒトの慢性Q熱の場合、長期に渡る疲労感、不定愁訴しよくじの人が多くみられ、やる気が起きない慢性疲労症候群と関係しているという報告もあり、注目されています。

動物の場合は、感染していても無症状の場合がほとんどですが、妊娠している動物には死流産の原因となる可能性があります。

【予防】

過剰な接触を避け、ふれ合ったあとは、必ず手を洗う、口移ししよくじで食餌をあげたりしないこと。

【治療法】

抗菌薬の投与

※ 不定愁訴：はっきりしない症状



ネコひっかき病〔Cat Scratch Disease〕

キーワード	ネコ、ノミ、リンパ節腫脹 <small>しゅちよう</small>
病原体	バルトネラ菌
感染動物	ネコ、イヌ、ノミ

【動物の症状】 無症状

【人の症状】 リンパ節腫脹、発熱、疼痛とうつう（ずきずき痛むこと）

【感染経路】 感染ネコやイヌによる咬傷こうしょうやひっかき傷、感染ノミによる咬刺こうし

【感染経路を知る】

その名の通りネコにひっかかれたり、咬まれたりした後に発症する病気です。このバルトネラ菌を広めるのはノミで、感染ノミに刺されたりしても感染しますし、イヌから感染することもあります。ヒトがイヌから感染しても“ネコひっかき病”といいます。ヒトが刺されると、発熱やリンパ節が腫れたりしますが、感染しているネコはほとんど症状を示しません。動物とふれあう機会が多い子どもに多く、15歳以下が半分を占めます。発生時期は7～12月にかけて多くみられます。

【病原体データ】

ひっかき傷以外にノミが感染源となることもあります。特に若いネコ、遊び好きでやんちゃな仔ネコは、飼い主にじゃれてひっかいたり咬んだりしますから、大人のネコより感染源となる機会が多いです。

【予防】

手洗い、消毒。

ノミがこの病原体を伝播でんぱするのでノミの駆除も効果的。



【治療】

抗菌薬の投与



トキソプラズマ症 (Toxoplasmosis)

キーワード	ネコ、妊娠、豚肉
病原体	トキソプラズマ
感染動物	ネコ

【動物の症状】 無症状

【ヒトの症状】 無症状、流産、水頭症

【感染経路】 けいこう
経口

【感染経路を知る】

ネコの糞便や完全に熟調理されていない肉の中に入っているトキソプラズマがヒトの口から入ると、トキソプラズマ症になることがあります。健康であれば症状が出ないかリンパ節が腫れたりする程度で済みますが、妊娠中や病気で抵抗力が落ちているヒトで重い症状が出る場合があります。欧米ではエイズ患者の30%近くがトキソプラズマによる急性脳炎で死亡しています。

欧米ではネコの糞便のトキソプラズマからの感染よりもトキソプラズマに感染した生肉を食べることで感染するケースが多いといわれています。

【病原体データ】

ネコはトキソプラズマ症に感染している生肉や小動物を食べることで感染します。

大人のネコではほとんど無症状ですが、仔ネコに感染して重症化する



と呼吸困難や視力障害、神経症状で死亡することがあります。感染源のトキソプラズマ原虫を排出するネコは感染後、1～3週間の期間だけで、それもほとんどが仔ネコです。ネコの糞便に排出されるトキソプラズマ原虫は消毒薬に強く、屋外で1年以上も生存していたと報告があります。

【予防】

ネコは家の中で飼い、トキソプラズマ症に感染している生肉や小動物を食べさせないこと。また、トキソプラズマは冷凍しても死なないので、お肉（特に豚肉）は必ず加熱して食べること。

【治療】

症状が出ていない人は治療する必要はありません。妊娠中にトキソプラズマ症に感染した場合でも、治療することで症状を最小限に抑えることができます。

第3章

トリからうつる

ニワトリの起源は約5000年前のインドから東南アジアにかけての、ヒトが農耕生活を送るようになった場所に生息していた野鷄(ヤケイ)との出会いから始まりました。はじめは定刻通りの鳴き声や闘鶏の結果で吉凶を占ったりしていました。やがて肉や卵を生産するニワトリとして飼われるようになりました。ニワトリやアヒルなどはペットというよりもどちらかという、家畜(家禽)としての歴史がほとんどです。

一方、カゴの鳥といわれるインコ、オウム、文鳥、十姉妹などの歴史は浅く200年ぐらいといわれています。こちらは、肉や卵を食べたりするのではなく、あくまでも観賞用です。

人類が豊かになり、自分以外の動物を養うことができるようになったので“観賞用”という余裕ができたのでしょうか？

200年前というのは人類が船を使い“生息地”を拡大していった時期と重なります。





鳥インフルエンザ (Avian Influenza)

キーワード	インフルエンザ、新型、ニワトリ
病原体	インフルエンザA型ウイルス (H5あるいはH7亜型)
感染動物	ニワトリなどの家禽、野鳥

【動物の症状】 元気消失、チアノーゼ、顔面の浮腫、突然の死

【ヒトの症状】 発熱、感冒、死亡

【感染経路】 接触、経気道、経口

【感染症を知る】

鳥インフルエンザがヒトからヒトへ感染するようになると新型インフルエンザと呼ばれ、その感染率と死亡率の高さから、いったん流行が起これば、爆発的に世界へ拡がると懸念されています。そのため家畜伝染病予防法では、鳥インフルエンザが発生すると、発生農場及び発生農場と同一飼養者が管理している農場のニワトリはすべて殺処分され、死体は焼却・埋却または消毒され、予防制圧を行います。新型インフルエンザが流行した場合、これに対して免疫を持っている人はいないため、かなりの数の患者と死亡者ができると予想されており、国内では数万人の死者が出ることも懸念されています。このため政府は、発生時の対応マニュアルや薬剤の備蓄などを準備しています。万が一、流行が起これば入院施設も足りなくなると予想され、体育館などを入院施設にする計画等も考えられています。

【病原体データ】

一般的なインフルエンザとは、かぜ症候群の一種で、インフルエンザウイルスの感染によって起こる病気です。呼吸器を中心に全身症



状を示すことと、流行を繰り返すことが特徴です。インフルエンザウイルスは抗原性の違いから、ウイルスの表面にある赤血球凝集素（HA：Haemagglutinin）とノイラミニダーゼ（NA：Neuraminidase）という、2つの糖蛋白の抗原性の違いにより亜型に分類されます。この赤血球凝集素（HA：Haemagglutinin）はHと記され、1～15まで種類があり、ノイラミニダーゼ（NA：Neuraminidase）はNと記され、1～9まで種類があります。この組み合わせ“15×9”で135通りの亜型を持つこととなります。この中のH5およびH7亜型が死亡率の高い強毒株として特に監視されています。

【予防】

効果的なワクチンは開発中です。普段から“手洗い”や“うがい”などを行い、発生時には外出を控えることが重要です。加熱した卵や鶏肉からの感染報告はありません。

【治療】

抗インフルエンザウイルス剤



オウム病〔Psittacosis〕

キーワード	トリ、呼吸器疾患、粉塵
病原体	オウム病クラミジア
感染動物	トリ（オウム、セキセイインコなど）

【動物の症状】 無症状、羽毛逆立、下痢

【ヒトの症状】 発熱、咳、肺炎、筋肉痛

【感染経路】 ひまつ けいこう
飛沫、経口感染



【感染経路を知る】

オウム病の病原体は糞便に排泄されます。その乾燥した糞便を吸入することで感染する可能性があるため、鳥カゴを常に清潔に保つことが大切です。また食餌しょくじを口移しで与えたり、トリに咬まれて感染することもまれにあります。

【病原体データ】

オウム病クラミジアは、オウム・インコ類、家禽、野鳥と幅広く鳥類に感染しています。

オウム病で問題となる鳥の種類は、オウム・インコ類で、その約1/3がセキセイインコでした。トリからヒトへの感染で重い症状を起こす種類として重要な順に、オウム・インコ類、ハト、シチメンチョウ、アヒル、フィンチ類（十姉妹やカナリアなど）、野鳥、そのほかとなります。

オウム病は成人が発症することが多く、子どもへの感染は比較的少ないといわれています。

ヒトが感染した場合、インフルエンザに似た症状が起きます。一般的にカゼの時に使用する抗菌薬（ペニシリン系など）は、オウム病クラミジアには効きません。トリを飼育してヒトにカゼの症状が出て、トリの具合も悪かったり、死亡したりしていたらそのことを医師に告げることが大切です。

トリが感染した場合、さえずり、おしゃべりなどの元気がなくなり、また食欲もなくなり痩せてきますや。さら、下痢を起こしたり、死んでしまう場合もあります。

【予防】

口移しで食餌しょくじなどを与えない、トリに触ったら必ず手を洗うこと。鳥かごはよく掃除して清潔にして、糞便もなるべく早く片づけること。



【治療】

抗菌薬の投与



クリプトコックス症〔Cryptococcosis〕

キーワード	カビ、免疫不全、ハト
病原体	クリプトコックス菌
感染動物	ハト、ネコ

【動物の症状】 ハト：無症状

ネコ：無症状、呼吸器症状、神経症状

【ヒトの症状】 肺クリプトコックス症：発熱（軽度）、胸痛

クリプトコックス^{ずいまくえん}髄膜炎：中枢神経症状、死亡

【感染経路】 吸入

【感染経路を知る】

クリプトコックス菌は、ハトの蓄積した糞の中で増殖したり、止まり木に付着しています。ハトの糞が乾いて舞い上がり、それが呼吸とともに、ヒトの肺の中にクリプトコックス菌が取り込まれます。そのように感染し、肺に軽い病巣をつくる軽い病気です。免疫不全の患者でごくまれに中枢神経に感染して髄膜炎や脳炎を起こします。

しかし、HIV感染症の患者や臓器移植後の免疫抑制剤使用者など、免疫力が低下した人が、日和見^{ひよりみ}感染症的にクリプトコックス菌に高率で感染します。そのような人には、中枢神経に病変をつくり、しばしば致死的になります。

なお、ネコエイズ（FIV感染症）に感染しているネコも同様に、この病気にかかります。



【病原体データ】

トリの体内は哺乳類より体温が高いため、感染も増殖もしません。トリではクリプトコックス菌が増殖できないので、物理的にばらまいたり運んだりする点で重要です。ヒトや動物は糞便の粉塵を吸入することにより感染します。健常者にはほとんど感染しませんが、免疫不全や免疫力の弱いお年寄りは容易に感染します。

またこの菌は、呼吸器に感染後、神経組織に移動して髄膜炎、脳炎などを起こします。

【予防】

体力、免疫力の低下した人は、ハトの近くに近寄らないこと。

【治療】

抗真菌薬の投与

第4章

ウサギ・ハムスターからうつる

ウサギはもともと家畜として2000年ほど前の地中海付近で飼われ始めました。日本へは16世紀頃オランダ経由で渡ってきて飼われ始めました。一方、ハムスターは1800年代に発見されて、ペットとして飼われだしたのは、50年程前からです。はじめは実験動物として、注目され戦後ペットとして家庭の中に入ってきました。

ハムスターは人気が高くその飼育頭数は推定でイヌ、ネコに次ぐといわれています。

ウサギやハムスターは、鳴かない、散歩がいらぬ、フワフワしているということから、女性や一人暮らしの人に人気です。





皮膚糸状菌症 (Dermatophytosis)

キーワード	皮膚、カビ、脱毛
病原体	<small>いぬしょうほうし</small> 犬小孢子菌、 <small>はくせん</small> 毛そう白癬菌 (水虫のこと)
感染動物	ウサギ、ハムスター、イヌ、ネコ

【動物の症状】 無症状、円形脱毛、かゆみ

【ヒトの症状】 円形発赤、水ぶくれ

【感染経路】 接触

【感染経路を知る】

皮膚糸状菌症とは皮膚にカビが生える病気です。免疫の弱っている幼弱動物や、湿気のために皮膚が弱っていると皮膚糸状菌が侵入しやすくなり、感染します。

皮膚糸状菌が侵入しますと、その脱毛の様相は“リングワーム”と呼ばれ、脱毛は円形に広がっていきます。

仔イヌやウサギで発生すると、抱く機会の多い子どもや女性の皮膚に感染することがあります。腕や首周りなどは直接接触する場所なので、皮膚病変がみられやすいです。

ヒトの皮膚に皮膚糸状菌の孢子*がつくと、皮膚の浅い部分で増えていき、丸い赤みや水ぶくれができます。

【病原体データ】

皮膚糸状菌とはカビの仲間です。感染すると丸いハゲができて、同心円状に広がり軽いかゆみが出たりすることもあります。かゆみなどの症状が少ないと長い間、孢子をばらまいていることがあります。

皮膚糸状菌症は湿った環境で発生しやすいので、環境を整えて抗真菌



薬を使用すれば治る病気です。安心してください。

【予防】

湿った環境は発生しやすいので、環境を整えること（ハムスター類は水槽飼育を避けるか通気性をよくしてください）。

毛やフケでうつることもあるので、部屋の掃除をこまめにするこ

【治療】

抗真菌薬の投与

※ 胞子：カビの仲間は胞子が散らばって増えていきます。

● 雑学 ●

ウサギを数えるのに“羽”と数えることもあります。それは江戸時代に「生類哀れみの令」という法律で4本足の動物は殺したり、食べたりすることが禁止されたことから始まりました。「生類哀れみの令」では鳥を食べることについては禁止されていなかったの

ので、ウサギは鳥の「ウとサギ」だとこじつけ、ウサギも鳥だといって食べていたのです。その名残で、現在でもウサギを鳥と同じように数える場合もあります。

日本書紀に出てくる因幡の白兔いなばしろうさぎをご存じでしょうか？

悪患がばれて、サメに皮を剥がされて大国主命おおくにぬしのみことに助けられるお話です。これは記録に残る最古の獣医療で、大国主命が元祖獣医師ならガマの穂も記録に残る最古の動物用医薬品なのです。

第5章

輸入動物からうつる

日本はいつから輸入動物大国となったのでしょうか？

昭和40年代は、ペットショップといえば、文鳥、^{じゅうしまつ}十姉妹、インコ、金魚、メダカ、エンゼルフィッシュぐら이었다のように記憶しています。それがいつの間にやら、ハリネズミ、大型オウム、チンチラ、古代魚、ヘラクレスオオカブトムシなど、昔は動物園でしかみられなかったような生き物が売られています。

アメリカや中国、イギリス、フランスなどは自国の生態系を守るため商業用動物の輸入を禁止しています。どうして日本だけが時代に逆行しているのでしょうか？

答えは簡単です。買う(飼う)人がいるから、売る人がいる、のです。輸入された動物は気の毒です。このように輸入動物の病気は、アンテナを張り巡らさなければ気がつかないことが多いのです。





サルモネラ症 (Salmonellosis)

キーワード	食中毒、八虫類、下痢
病原体	サルモネラ菌
感染動物	八虫類(ミドリガメ、イグアナなど)、イヌ、ネコ、ウシ、ブタ、ニワトリ

【動物の症状】 無症状、下痢

【ヒトの症状】 腹痛、下痢、発熱

【感染経路】 経口

【感染経路を知る】

サルモネラ菌は、病原性大腸菌症、腸炎ビブリオとならび3大食中毒症としてよく知られています。通常はサルモネラ菌により汚染された肉や卵により感染します。食中毒以外では、健康な八虫類(ミドリガメ、イグアナ等)の腸内に保菌していることが多いので、カメなどを、飼育することが多い子どもへは充分注意が必要です。

特に輸入したての小さなミドリガメは、無症状のことが多いので注意が必要です。

最近、イグアナも飼育する人が増えました。鳴かない、散歩がいらぬ、手間がかからない、手頃な値段という理由からですが、米国では小児の重症例も報告されています。

【病原体データ】

サルモネラ菌は環境に広く分布しており、ウシ、ブタ、ニワトリなどには10~30%、イヌやネコからは3~10%、カメで50~90%も感染していると報告があります。



また広く河川、下水などの自然界にも広く分布している細菌です。

この菌は、乾燥に強く、土壌中で数年間生存できます。

ヒトに感染すると、8～48時間で腹痛、下痢、発熱が起こり、重症になると粘血便を排泄します。免疫力のないヒトが感染すると死亡することもあります。

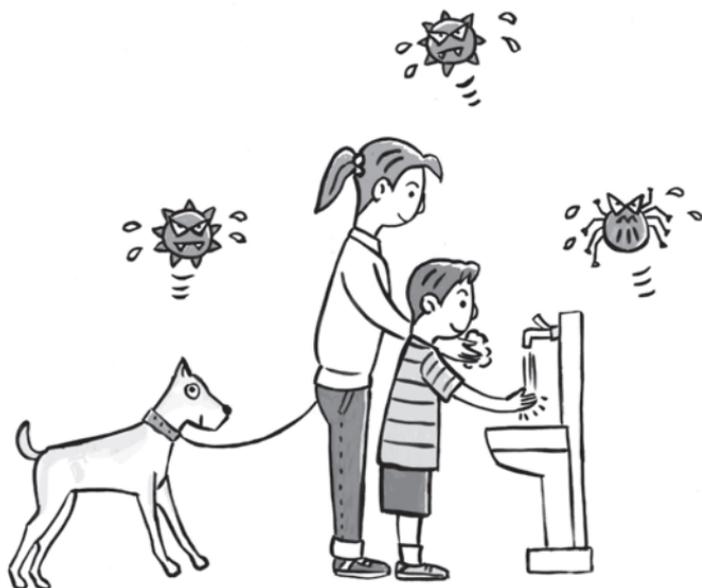
食中毒として発生報告が主なので、7～9月に感染が多いといわれています。

【予防】

ペットを触ったあとは、よく手を洗うこと(小さい幼児には、ハ虫類はペットとして適しません)。

【治療】

抗菌薬の投与



第6章

予防方法



『過度な接触は避けるように!』

この手の本には、そう書いてあります。

冒頭にも書いたように、動物好きには動物とのスキンシップは欠かせません。

では、そのボーダーラインは？

著者は、最近こう説明しています。

『友達と同じ感覚で接してください』。

つまり、友達とは手をつないだり、軽いスキンシップはしますが、口移しでご飯を与えたり、年中寝室まで共にしませんよね？ 一緒に遊んだりしたあとは、手を洗ったり、うがいをしたりして、家に入りますね。それを実践すればよいのです。

そうすれば、ほとんどの“動物由来感染症”は防げます。

また、動物を飼育し始めて飼い主さんの調子が悪くなったら、医療機関で飼育歴を話すのもよいでしょう。また、同時に動物も調子が悪くなったら、医療機関と動物病院のどちらにもお互いの調子をお話すると解決の糸口がみえてくることもあります。

次なる侵入者は？

人類の繁栄の陰には常に感染症がつきまといました。古代のヒトは経験論から“病気は病気のヒトの近くにいくと乗り移る魔物のような生き物”と恐れられていました。ヨーロッパで人口の1/3～1/2を死に至らしめたペストの大発生の時は、奇妙な格好で魔物の乗り移りを防いでいました。

科学的に感染症と戦った最初の記録は1796年イギリスの医師ジェンナーが痘そ^{とう}の予防のために、牛の病気である“牛痘”を用いて初めて“種痘”を行いました。これが“予防接種”の始まりです。医師であるジェンナーは、牧場で働くヒトに痘そ^{かか}うに罹るヒトが少ないことを感じていました。そして、牛の病気である“牛痘”の発生した牧場では、痘そ^{とう}の数が少ないことから、“種痘”を考えつきました。当時、死亡率の高い感染症として猛威をふるっていた痘そ^{とう}ですが、“種痘”によって多くの人々の命が救われることになりました。そして、1967年よりWHO（世界保健機関）を中心として種痘による「天然痘根絶計画」が行われた結果、1979年には患者発生がゼロになり、翌年、ついに「天然痘は地球上から根絶された」ことが宣言されました。

予防接種が行われるようになって、わずか200年での奇跡です。しかし、ヒトの栄光は続きはしません。

動物由来感染症は、世界的には制圧の方向ではなく、新種が発見されたり、過去の感染症が問題になったりして増加傾向にあります。

ここ数年見ても、マレーシアのブタのニパウイルス感染症（ブタと

ヒトの致死性疾患)、オーストラリアのウマのヘンドラウイルス感染症(ウマとヒトの致死性疾患)などは、教科書にも載らないぐらい新しい感染症です。また、ニューヨークのウエストナイル熱の発生は感染症の再興といわれています。

では、日本では次に何が危ないか……。

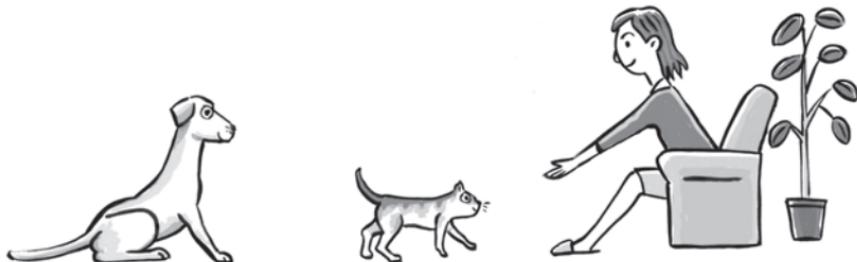
特に、ペットとして問題があると思われるのは、輸入ペットからの共通感染症の狂犬病、ペスト、野兔病、国内の移動で問題になるのはエキノコックス症などでしょうか？

また、蚊を媒介する病気であるウエストナイル熱、マラリア、デング熱などは、明日にでも日本に入り込んでも不思議はありません。

侵入してから大慌てしないように、まず知識をつけて、感染(蔓延)を防ぎましょう！

侵入者はすぐそこまできています。

(兼島 孝)





監 修 日本医師会感染症危機管理対策室

TEL 03-3942-6485 FAX 03-3946-2684

E-mail kansen@po.med.or.jp

<http://www.med.or.jp/kansen/>

執 筆 兼島 孝 (獣医学博士)

埼玉県 みずほ台動物病院院長

<http://www.mizuhodai.com/>

沖縄県 琉球動物医療センター院長

<http://www.ryukyu-animal.com/>

発 行 社団法人 日本医師会

〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16

TEL 03-3946-2121 (代表)

<http://www.med.or.jp/>

担当課 日本医師会地域医療第三課

第1版1刷 平成17年1月13日発行

第2版1刷 平成17年2月4日発行

第3版2刷 平成17年7月20日発行

第4版1刷 平成18年5月15日発行

第5版1刷 平成19年3月30日発行